

浄土真宗・お念仏とは

第一回

宗教は、「しつけ」と同じように子供の頃に、親から受け継ぐものです。道徳や倫理と同じく、大人になる前に身につけておくべきものでした。

ところが、この半世紀の間、知識だけは、一生懸命に教えようとしたが、人間として生きる智慧は、国民あげて忘れてしまっていたようです。

そして、重要だという知識教育でさえも、学校や学習塾の先生にまかせ、入学試験に出る知識が中心で、自分の子供にとつて、最も必要なものを、ちゃんと伝えることが、出来ずにいたようにも思います。

裏返すと、子供に伝えるべき最も大事なものを受け取らないまま、親になり親として、子供や孫に何を伝えたらよいか、分からずに、迷っているのが、

今の大人の実態のようです。人間にとつて、何が必要で、何が大事であるのかが、分からぬ未成熟な大人たちに養育されている、現代の子供たちこそ、大変かわいそうです。

ところで、地方の家庭には、ほとんどお仏壇がありません。江戸時代の先祖が、数ある教えの中から選び取った宗教です。ところが、形だけが残り、先祖が伝えようとしたその教えの内容は受け継がれていないケースが多いように見受けられます。

今こそ、情操教育が必要だ、宗教教育が必要だと、言われますが、はたして、わが家の宗教がどんな教えであるのかを、調べようと、書籍を探したり、所属の寺院の住職に聞いてみても、なかなか分かりにくいことばかりです。

説明される内容が、常識では、理解出来ないことばかりだからです。私ども浄土真宗の教えは、

特に、常識を越えた教えです。

「浄土真宗の入門書」を見ると、子供のころからお念仏に親しんだ人には、理解出来ても、初めて読む人、聞く人には、難しく、その考え方が、なかなか理解出来ないことばかりです。それは、馴染みのない専門語や、違った意味で使われている用語が多く、読んでも聞いても、なかなか意味が通じないものです。

信者のため、信じる人のために、書かれた解説書や法話が大半で、予備知識のない人には、外国語を読むように部分的にしか理解出来ません。

そこで、はじめてお寺に行くようになった人、おじいちゃんやお祖母ちゃんを亡くして、お寺と関わることになって、とまどっている人。毎日の生活に、何の不满もないものの、どこか虚しく感じ、生きがいが見つけられない人。そして、自分の親は何で頻

繁にお寺に、出掛けたのか知りたい方。子供や孫に、何を伝えたいのか、具体的に知りたい方。

インターネットのなかに浄土真宗、お念仏の基本的なことを、わかりやすく、そんなに長くなく、短く紹介してくれているのをみつけました。

是非、読んでみてください。

疑問が出て来たら、専門書やご住職へ聞いて下さい

この内容は、成人してから教えに出会った一人の住職が、俗世間の生活感覚で、お念仏の教えの味わいを紹介しているものです。



8回に渡って連載します

感謝も懺悔もなき愚か者でございます。お念仏申しなさいよ！！

ホームページは「お墓のさんわ」で検索してください。

日出店：速見郡日出町川崎会下(空港道路入口) TEL (0977) 72-6415
三重店：豊後大野市三重町赤嶺1041(トリアル横) TEL (0974) 22-3301
森町店：大分市横尾2733-1(大東中学入口) TEL (097) 524-6525

さんわ便り

第165号
発行所
さんわグループ
編集 広報部
大分市森町

鈴木章子(あやこ)

昭和16年生まれ 北海道

真宗大谷派・西念寺坊主

斜里大谷幼稚園の園長

昭和63年 往生

行年47歳

ガンとの出会い

昭和五十九年四月、当時

寺が運営している幼稚園の

園長であった私の胸に、

「えんちようせんせい」と

いつて、子どもが勢いよく

とびこんできました。

その時、左乳につきさすよ

うな激痛が走りました。

それがガンとはじめての

出会いでした。札幌の北大

附属病院第一外科の外来に

行きました。数日後、病院

から電話があり、「悪性の

ものしたので、手術が必要

です」という事で、二日後

に北大病院へ入院しました。

特に今まで仕事、仕事と過

で機能化した家庭には私でなければならぬという場もなく、妻として母として、一つ一つの積みあげをながしろにしてきた日常生活の中で、ドッシリとした立場もないことに気づかされました。

そして、K先生が話された「今日も一日、赤い着物を着て、チャラチャラ踊って、夜、ふとその空しさに気づくことはありませんか?」

「どんな立派な建物でも、人が住まない家はすぐに荒れ果ててしまうそうですよ。あなたの心にきちんと人が住んでいますか」という言葉が思いだされ、取り返しつかない時間、取り返しのつかない生き方をしてきたのではないかという思いが走りまわりました。

そんな時に、八十歳を過ぎた実家の父から手紙があり

「あなた、たは、一体何をドタバタしているのか。生死は、仏さまにお任せ以外にはないのだ。人知の及ばぬことはすべてお任せなさい。そのために、お寺に生まれさせてもらって、お寺に嫁いだのではないか。生死はあなた自身が考えることではない。自分でどうにもならぬことをどうにかしようとするのは、あなたの傲慢である。ただ事実を大切にひきうけて任せなさい」と書いてありました。その父の言葉にほっとして、「過去を今さらやり直すことはできない。そういう生き方をしてきた自分を自覚し、誤りは誤りとみとめて謝っていくのだ」とわかりました。そして初めて、代ってもらったことのできない、誰にも責任を転嫁できない自分の人生であることに気づかされました。

「まかせよ・まかせよ」

如来の声「おまかせします」

私の声

おかげさまと感謝

よく新聞などで有名人がガンで亡くなると、「ガンに負けた」といいますが、死が負けであるなら、生きとし生けるものすべて敗者であらうかと思えます。

私は肺一葉切りとることにより、元気な頃よりも自分の体を自覚し、「手もあつた!足もあつた!あれもこれもあつた!あつた!」と思いかげずありあまる程の沢山のものをいただくことができました。

また、ガンという病気のおかげで、死をみつめなおし、過去46年間の生命をもう一度生きることができました。

俱会一処の浄土

また、身にあまる程のおかげさまに出あうことができ、還るべき私の故郷も父母の死を通して、はつきりと見えてきました。

(中略 そのあとすぐに父母があいついで往生)

私がガンになり、父母が亡くなったということは、世間からみれば、不幸つづきということですが、皆さんが気づかない慰めて下さるのですが、私にとっては悲しさとは別の充足感がありました。別離の悲しみは勿論ありましたが、それに増して父母が還っていった大いなる生命の故郷に、電気がポツとついた感じで、「いつでも還っておいで、待っているよ」という声が聞こえて、木をみても山をみても、雲をみてもその息がきこえるという、不思議な世界に今います。俱会一処(ともに一処)に会うことができる)の世界を見せていただきました。

いろいろなものに護られているという充実感でいっぱいです。いつかまた、父母と一緒に大分の中を旅するのだ。父母が亡くなったという悲しみよりも、私のために故郷に灯をつけて、帰ってくれたのだと思われて、父母の死は感謝の死でした。